

“既然”文と「なら」文の前後件の時間順序から見た意味連続性
— 図地分化とトラジェクター・ランドマークとの連合から —
Semantic Continuity from the chronological order of Sentence "Jiran" and Sentence "nara":
From the Combination of Figure-Ground and Trajector-Landmark

祁 吉曼

QI Jiman

要旨: “既然”文と「なら」文は推論と因果との意味連続性を生じる複文である。本稿では、定量的方法により、それぞれ [+因果性] と [+推断性] を表す場合の本質的な意義素性を明らかにすることを目的として、認知言語学における図地分化とトラジェクター・ランドマークとの連合から、時間順序に基づいて、前後件の事態の意味特徴と傾向を検討する。研究結果として、“既然”文が [+因果性] を表す場合には、[±事実] [±断言性] [±確定性] [+已然] [-主観性] [前件: ±共通認識] という意義素性を有しているが、「なら」文は、それと異なる意義素性は [+事実] [+断言性] [+確定性] であることがわかった。一方で、“既然”文が [+推断性] を表す場合には、[前件: +事実] [前件: +断言性] [前件: +確定性] [前件: ±已然] [前件: +共通認識] [後件: -事実] [後件: -断言性] [後件: -確定性] [後件: -已然] [+主観性] という意義素性を有しているが、「なら」文の区別している意義素性は [前件: +已然] [後件: ±事実] [後件: ±断言性] [後件: ±確定性] [±主観性] である。また、両者は現実の時間順序と反対の思考の時間順序に合致する場合には、概念化の過程中的のトラジェクターは概念化の完成後での図と重なることを明らかにした。

キーワード: 「なら」文 “既然”文 因果性 推断性 連続性

目次

- 1 はじめに
- 2 先行研究
- 3 図地分化とトラジェクター・ランドマーク
- 3.1 共通点
- 3.2 相違点
- 4 「なら」文の意味連続性
- 4.1 [+因果性]: [+行動の順序] の場合

4.2 [+推断性]: [+思考の順序] の場合

5 “既然”文の意味連続性

5.1 [+因果性]: [+行動の順序] の場合

5.2 [+推断性]: [+思考の順序] の場合

6 おわりに

参考文献

1 はじめに

“既然”は推論の因果関係を表す関連標記であり、話し手と聞き手との両方の共通認識によって事態間の因果関係を推論するものである(邵洪亮、史春磊,2025)。“既然”も現代中国語においてよく見られる原因を表す標記であり(陳禹,2023)、ある場合には、“既然”文は推論を表さず、叙述を表している。そして、その後件には“于是”という因果性の関連標記が含まれている(郭繼懋,2008)。例えば、

(1) 姚家既然深信木兰是被拐卖了, 于是搜寻几天得不到结果之后, 就决定往运粮河上去找。(林语堂《京华烟云》)¹

上例は“既然”文が因果関係を表す場合である。一般的には、“既然”文が推断関係を表すが、推断関係も広義の因果関係に属するので、推断性と因果性との関係が緊密であると認められる。

「なら」が仮定関係を表すのは普通であるが、事態領域の関係を表す場合は、前後件の事態が「原因—結果」という関係を表すが、認識領域の関係を表す場合は、「前提—結論」という関係を表す(尹聖楽,2023)。それにより、「なら」も“既然”のように推断と因果との意味を表している。例えば、

(2) どうせつりあいをとるなら、幸運と不幸だけじゃなくて、夫婦間の力関係のつりあいもとってくれ。(友野詳『奈落にときめく冒険者』)

例(2)では、前件の事態は後件の原因のみならず、後件の事態が成立する根拠となっている。

本稿では、「なら」文と“既然”文の意味連続性の本質的な表現をどう理解するのか、それぞれ [+因果性] と [+推断性] を表す場合には、どのような意味特徴や傾向などがあるのか、という問題について、その構文特徴を分析しながら、解明を試みる。前後件の時間順序は文の意味を分析する鍵であるので、認知言語学における図地分化とトラジェクター・ランドマークとの連合という観点から、以上の問題を検討しようとするものである。

2 先行研究

先行諸研究の中で、“既然”文を他の文と比較して研究するケースは多く見られる。劉

¹ 本稿の例文は具体的な説明がなければ、BCCあるいはBCCWJからの引用である。

利・朱光鑫（2025）は“既然”文の後件の事態が事実なのかどうかにより、それを“既然₁”文と“既然₂”文に分ける。前者は因果関係を表し、その文法と意味の特徴が“因为”文と一致し、因果文に属するものであり、後者は条件関係を表し、その文法と意味の特徴が“如果”文と一致し、条件文に属するものであると指摘する。つまり、“既然”文は“因为”文と“如果”文の間に意味的連続性が生じると認められる。それでは、“既然”文そのものに意味連続性が生じる合理性もあるのではないかと考えられる。

また、その主観性に関する研究も多く現れている。“既然”文は交互の主観性（intersubjectivity）を表すものである（鐘小勇、張霖,2013；劉月華他,2002；郭繼懋,2008）。言い換えれば、“既然”文の前件の事態は話し手と聞き手が共に知っている命題であり、話し手と聞き手との相互交流を体现できる。“既然”文は主観的な原因を表す傾向がある（呂叔湘,1999; 刑福義,1996、2001; 李晋霞、劉曇,2004；郭繼懋,2008；張静,2015）

“既然”文の表す推論の因果関係は話し手の認知に隠される“如果”文の表す仮定関係を大前提に、“如果”文の認知的基礎に基づいて成立するものである（邵洪亮、史春磊,2025）、という点は、「なら I」文の表す推論意味が「なら II」文の表す仮定意味との境目が明確でない（李光赫,2012）という説に近接している。また、「なら」文が主観的な仮定の因果関係を表している（李紅,2015）。そのため、本稿では、“既然”文と「なら」文を対照的な対象に位置付け、それぞれそれらの意味的連続性²を検討することにした。

そして、先行諸研究の中で、「なら」文は大體、「なら II」で表示する仮定表現（ある事態の真偽や実現可能性に関して可能な事態として前件の命題を設定する）と「なら I」で表す既然の事実に基づく推論意味という二つに分類する（久野暉,1973; 網浜信乃,1990; 尹聖楽,2023）。「～たなら」は「前件の完了した場合に、その後で後件が起こる」という意味を表すので、「たら」文との置き換えの場合もある（前田直子,2009）。即ち、「なら」文と「たら」文との類似する用法は多く見られる（王伝礼,2001）。

認知言語学における関連理論とえば、主として英語と中国語での応用が少なくなかった。トラジェクター・ランドマークが英語と中国語の単文の構文分析に使われるのは一般的である（吳吉東、董海涵,2024; 杜娟,2010；李卿、任素貞,2008）。また、凶地分化も中国語と英語の言語研究においてよく見られ（宮同喜,2012; 彭芳,2013; 文旭、劉先清,2004; 么孝穎,2007; 王文斌,2015）、日本語の複文分析に使われる場合も少なかった（樋口万里子、大橋浩,2004；甲田直美,2001；川端善明,1958）。そのため、本稿では、凶地分化とトラジェクター・ランドマークとを連合して「なら」文と“既然”文の前後件の事態の関係を捉えようとする。さらに、その意味連続性の本質的な特徴と構文特徴を明らかにすること

² 「なら」文と“既然”文は推論と仮定との意味連続性も存在しているが、本稿では、その推論と因果との意味連続性を検討している。

にしたい。

3 図地分化とトラジェクター・ランドマーク

図と地 (Figure-Ground) とは、デンマークの心理学者であるエドガー・ルビンが明らかにした知覚現象のことであり、認知言語学における重要な概念である。空間上の図 (Figure) とは人間の知覚の上で際立つ対象の一方であるが、地 (Ground) とは図に対して知覚の上であまり際立たない対象の他方である。対象の形を知覚するためには、対象を背景から分離し、まとまりとして取り出す必要がある、ということを図地分化と呼ぶ。人はモノを見るときに無意識のうちにまとまりをもったものとして知覚する傾向をもっている。図1の通り、視野の中に二つの対象が存在するとき、一つは形として目に映り、もう一つはその背景を形成しているように捉える。左の図について、向かい合った人間の顔だと見た場合には、顔の部分が図となり、盃の部分が背景としての地となっている。逆に、右の図 (「ルビンの盃」) について、盃の絵だと見た場合には、盃の部分が図となり、顔の部分が背景としての地となっている。そうすると、顔の部分と盃の部分がいずれも図となる可能性がある。図は形を持ち、地は形を持たない。図と地の反転が生じて、両方が同時に形を持つことはない。



図1：図と地の分化

図地分化が複文に応用されると、複文の従属節で述べられている事態は、主節で述べる事態にとって背景としての機能を果たしているので、地となるが、主節で述べる事態は際立つと認識されるものなので、図となる (小山哲春ほか,2016)。因果関係順接は、句二つの関係として前件が一般である場合から特徴的に始まるが、後件は一般の含む個別である。そのような一般と個別との対応が地と図の認識へと結びついている。つまり、ゲシュタルト要因からすれば、一般的なものが背景として機能し、限界性を持つ個別例が図となっている (小山哲春ほか,2016:42)。

トラジェクター (trajector(TR)) は認知主体が注意する焦点であるが、ランドマーク (landmark(LM)) は認知主体に用いられてトラジェクターの引き立て役として存在している参照物である。ランドマークはトラジェクターの認知参照点である (李卿、任素貞,2008)。

トラジェクターとランドマークの関係は、際立ちの非対称性を示す。ある関係がプロファイルされると、関係性を有する参加者に程度のさまざまな際立ちが与えられる。最も際立っている参加者は、トラジェクターと呼ばれ、ある場に位置づけられたり、評価されたり、記述される対象として解釈される。2番目に際立っている参加者はランドマークと呼ばれる。トラジェクターとランドマークの関係は、「どのような叙述も、基本的には認知主体の経験を反映するトラジェクター、ランドマーク等の関係から規定していくことが可能である」(山梨正明,2000)と言われるように、実にさまざまな言語現象を具現化している。

3.1 共通点

図地分化とトラジェクター・ランドマークはいずれも複文の分析に応用されるものと考えられる。両者は際立ちの相対性と関わっているが、共通点もあれば、相違点もあるものと思われる。その中で、共通点には三つがある。

一つ目は、トラジェクターが図となる場合もあれば、ランドマークが地となる場合もあることである。

二つ目は、ランドマークと地が参照点として、それぞれトラジェクターと図に対する評価と位置付けをすることである。

三つ目は、トラジェクターと図は評定する必要があるので、ランドマークと地との関係によって確認されることである。

3.2 相違点

図は注意の焦点として、地は背景として取り扱われるが、トラジェクターとランドマークはそれぞれ主の焦点と従の焦点として見なされる。即ち、トラジェクターとランドマークは共に際立つ対象であるが、それらの際立つ程度が違っている。ランドマークは注意の焦点になると、文の意味上の認知域の範囲は背景になる。つまり、地は焦点となる可能性がないが、ランドマークは従の焦点となる場合もあるものと考えられる。

「図地分化」は図と地が各一つ存在しており、対立的な関係があるものが、ランドマークは一つ以上が存在する場合もある。例えば、Across のトラジェクターはランドマークの向かいに位置付けられるが、このランドマークは第一のランドマークとして、ある参照点(第二のランドマーク)と違うものである。また、この参照点(第二のランドマーク)は具体的な説明がなければ、一般に話し手の位する所を指すものである(Langacker,R.W.(著),牛保义等(译),2013)。

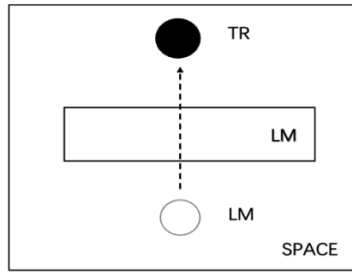


図 2 : ACROSS に関する TR と LM との位置関係 (Langacker, R.W. (著), 牛保义等 (译), 2013:222)

つまり、「トラジェクター・ランドマーク」は「図地分化」より、その応用性をもっと広いものと思われる。「トラジェクター・ランドマーク」は現実の時間関係と結び付けているので、トラジェクターが事態の概念化過程の起点と見做される。概念化の過程は情景変化の時間性と伴うものであり、情景展開の時間帯は過程の時間の側面を表示するものである。概念化が進むにつれて、事態の概念化が完成した後、トラジェクターは主の注意焦点として、ランドマークは従の注意焦点として認知される、という点は「図地分化」と同じである。そうすると、トラジェクターは図と重なり、ランドマークは地となる。

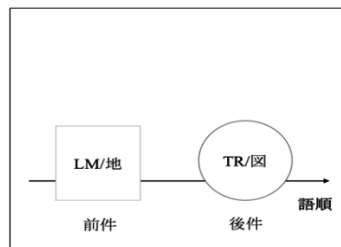
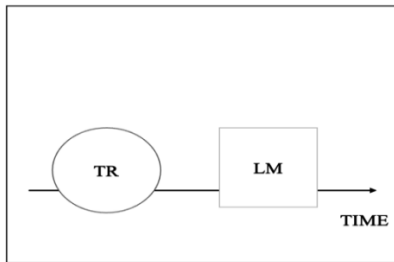


図 3 : 概念化過程で TR と LM との位置関係 図 4 : 概念化完成後の TR と LM との位置関係

上図から見ると、トラジェクターとランドマークは複文の文法上の問題との関係が緊密でないが、概念化に依存しているものである。言い換えれば、現実の時間順序により、前件の事態が先に発生すれば、トラジェクターとなる。図と地は概念化の時間と関係がなく、注意の焦点に依存しているものが、概念化が完成した後、注目される方は図となり、一方は地となる。勿論、概念化が完成した後、トラジェクターは主の注意焦点として、図と重なっているが、ランドマークは従の注意焦点として、地と重なっている。

4 「なら」文の意味連続性

先行研究により、「なら」文は因果と仮定条件、仮定条件と推論との間に意味の連続性

が生じる可能性があることが分かった。それでは、推論と因果との意味連続性も生じるのではないかと思われる。この仮説を日中対訳の角度から、取り敢えず間接的に検証するために、『中日対訳コーパス』における「なら」文の翻訳結果を表1のように整理した。

表1：「なら」の『中日対訳コーパス』における翻訳結果³

翻訳結果	A 要是/要… (的话)	B 如若/如 果…(的话)/ 如	C 若是/若	D 倘若/倘 使…(的 话)	E 既然/既
数量	156	403	40	31	106
翻訳結果	F 假如(若/ 使)…(的 话)	G 只要	H 即便	I 那么/那 (就)	J 的话
数量	53	31	1	98	53
翻訳結果	K 只有	L 与其…不如	M 就	N 因为	O 才
数量	2	2	36	1	3
翻訳結果	P 为了/为	Q 于是	R 可是	S 固有用法 なぜなら	T 無標
数量	3	3	2	37	382

表1からは、「なら」文の中国語訳は仮定条件関係を表す関連標記のみならず、“既然”“那么”“就”などの推断関係を表す標記もあれば、“因为”“于是”のような原因・理由を表す標記も少しあることが分かる。その翻訳結果によれば、間接的に「なら」文の因果と推論との意味連続性が生じる可能性があるのではないかと考えられる。

次に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の中で、「なら」を検索の対象にして、ランダムに150例の例文を選び出し、その意味特徴と構文特徴を分析し、量的方法により、各種の意義素の傾向をまとめることにする。最後に、時間順序に基づいて、「なら」文の[+因果性]と[+推断性]を表す場合に、それぞれどんな意義素性を有するのか、ということを明らかにすることにしたい。

時間順序について、戴浩一(1988)は、それは二つの節の相対的な順序がそれらの表示する概念領域における状態の時間順序を定めることと定義している。物理的な空間で

³ 調査を行った範囲是北京日本学研究中心編『中日対訳コーパス』における22の文学作品(『あした来る人』、『坊ちゃん』、『越前竹人形』、『布団』、『雁の寺』、『破戒』、『鼻』、『金閣寺』、『こころ』、『高野聖』、『黒い雨』、『野火』、『ノルウェイの森』、『羅生門』、『青春の蹉跎』、『飼育』、『死者の奢り』、『砂の女』、『斜陽』、『痴人の愛』、『友情』、『雪国』)である。有効な例文の数量は1443例である。

は、前後件の事態が発生すれば、行動の時間順序（現実の時間順序）に合致するが、心理的な空間では、前後件の事態はまだ発生していなければ、思考の時間順序（認知の時間順序）に合致する。また、従属節と主節との前後順序によって、事態の把握順序は現実の時間順序と一致しなければ、思考の時間順序に合致することになる。つまり、思考の時間順序は自由であり、現実の時間順序からの制約を受けないのである。

4.1 [+因果性]：[+行動の順序] の場合

「なら」文の前後件の事態は行動の時間順序に合致すると、推断性より因果性のほうが強いと思われる。

まず、前後件の事態はすでに発生しており、[+已然]の意味特徴がある。そして、「事実」とは事態上の「已然」と「未然」との直接的な対応関係が存在していないものである（劉利、朱光鑫,2025）。言い換えれば、已然の事態が非事実となる場合もあれば、未然の事態が事実となる場合もある、というのは話し手によって確認する必要がある。特殊な場合には、話し手は已然の事態 p により、他の已然の事態 q を推論しているが、q が推論に基づいた已然の事態であるので、真ではない。一方で、已然の事態 p に基づいた事態 q が発生しておらず、必然的に発生することが確定すれば、事実となると言えよう。ある事態がやがて事実となれば、[断言性]と[確定性]の意味特徴も生じるのではないかと思われる。

「確定性」は主として文の意味上と内容上の確定性を指している。「事実」は[+確定]を指し、「反事実」は[-確定]を指し、「非事実」は「不確定」を指している（戴耀晶,2017）。「確定性」に接近している概念は「断言性」であるが、「確定性」より、「断言性」は制限要素が多く、命題の内容に対する確定性を指しているのみならず、話し手の命題の真実性に対する承諾や保証なども指している（馮軍偉,2023）。最後は、「なら」文が主観的な仮定の因果関係を表しているのもので、その[主観性]の意味特徴もあるが、[+因果性]（[+行動の順序]）を表す場合には、どのような傾向が認められるのであろうか。前件の事態は原因として、話し手と聞き手との両方に知られるかどうかを調査する必要があるのであろう。

このような理由から、[事実][断言性][確定性][已然][主観性][前件：共通認識]を意義素にして、定量的な方法により、その傾向を表2のようにまとめる。

表2：「なら」文の[+行動の順序]を表す場合⁴

意義素	[事実]	[断言性]	[確定性]	[已然]	[主観性]	[前件：共通認識]
数量比例	20/22	20/22	20/22	22/22	5/22	12/22
程度	+	+	+	+	-	±

⁴ 「なら」文の前後件の事態が因果の意味を表しており、また行動の順序に合致するケースは、150例中、22例見られる。

表2の調査結果から、まず、已然の事態が必ずしも事実ではないということを検証することができよう。例えば、

(3) ノウサギがエニシダの茂みの中で、前脚でひげの手入れをしているところを、すぐに見つけられなかったなら、よほどのへまだということになる。(アンリ・ファーブル(著),原宏(訳)『人に仕える動物』)

例(3)は前件の原因により、後件の結果が生じることを表す。前後件の事態は行動の順序に合致する(「ノウサギがエニシダの茂みの中で、前脚でひげの手入れをしているところを、すぐに見つけられなかったこと」→「よほどのへまだということ」)、という概念化の過程で、「ノウサギがエニシダの茂みの中で、前脚でひげの手入れをしているところを、すぐに見つけられなかったこと」は概念化の起点で、トラジェクターとなるが、「よほどのへまだということ」は概念化が完成する前の終点で、ランドマークとなる。この概念化が完成した後で、後件の事態が注意の焦点(図)となり、前件の事態が背景(地)となる。

例(3)の文法形式から見ると、前件の事態は発生したが、事実でないという疑いがあるのではないと思われる。それにもかかわらず、「なら」文が[+因果性]を表す場合には、表2の調査結果の通り、それは[+事実][+断言性][+確定性][+已然]の意味素性を有している。

次に、「なら」文が[+行動の順序]を表す場合には、その主観性の程度は相対的に弱いであろう。例えば、

(4) ここの数値がスペックよりも著しく低いなら、CPUの能力が発揮できていないことになります。(唯野司『パソコンをはやくする88の方法』)

(5) 贈与の概念によっていいかえるなら、共同体によってはじめて個が与えられるという意識である。(竹沢尚一郎『共生の技法』)

例(4)(5)は何も行動の順序に合致する((4):「ここの数値がスペックよりも著しく低いこと」→「CPUの能力が発揮できていないこと」;(5):「贈与の概念によっていいかえること」→「共同体によってはじめて個が与えられるという意識」)。(4)の「ことになります」と(5)の「～である」は客観性の意味特徴を体現している。前件の事態は概念化の過程で、トラジェクターであるが、後件の事態はランドマークとなる。概念化が完成した後で、後件の事態は話し手が表したい重点であるので、図となるが、前件の事態は地となっている。

その他、例(3)と(5)により、ル形とタ形は何も已然の意味を表すことができる。言い換えれば、ル形は前件の事態の成立が見込まれることのみならず、前件事態が成立したことを表すが、タ形は前件事態が成立したことを表している。

最後に、前件の事態は必ずしも聞き手に知られないが、ただ話し手が自身の意志を表すことを原因にして、後件の結果を得る。例えば、

(6) 彼が自由でないなら、わたしはこの子を産むわけにはいかない。(マリア・ライヴ
ァ(著), 幾野宏(訳)『ディートリッヒ』)

例(6)の前件の事態(「彼が自由でないこと」)は概念化の起点で、トラジェクターとなるが、後件の事態(「わたしはこの子を産むわけにはいかないこと」)は概念化の終点で、ランドマークとなっている。概念化が完成した後で、後件の事態は注意の焦点で、図となるが、前件の事態は背景化の内容として、地となる。また、聞き手は必ずしも「彼が自由でないこと」を知っていないが、話し手自身の心配を表す可能性があるので、前件の事態が話し手と聞き手との両方共に知られるのは成立していない場合もある。

要するに、「なら」文が[+因果性]を表す場合には、[+事実][+断言性][+確定性][+已然][+主観性][前件：±共通認識]という意義素性を有している。

4.2 [+推断性]：[+思考の順序]の場合

「なら」文の前後件の事態は思考の時間順序に合致すると、因果性より推断性のほうが強いと思われる。

まず、前件の事態は已然の意味を表す、ということは「なら」文の仮定関係を表す場合の前件の事態の未然の意味と区別している。次に、「なら」文が[+推断性]を表す場合には、思考の時間順序に合致するので、後件の事態は未然の意味を表すことが分かった。最後に、前件と後件を区別しており、それぞれその意義素性を表示したほうが良いと思われる。

以下の表3のように、[前件：事実][前件：断言性][前件：確定性][前件：已然][前件：共通認識][後件：事実][後件：断言性][後件：確定性][後件：已然][主観性]を意義素にして、その傾向を定量的に表示する。

表3：「なら」文の[+思考の順序]を表す場合⁵

意義素	[前件：事実]	[前件：断言性]	[前件：確定性]	[前件：已然]	[前件：共通認識]	[後件：事実]	[後件：断言性]	[後件：確定性]	[後件：已然]	[主観性]
数量比例	28/28	28/28	28/28	28/28	28/28	16/28	16/28	16/28	0/28	10/28
程度	+	+	+	+	+	±	±	±	-	±

表3の統計結果により、まず、前件の事態は一般的に話し手と聞き手との両方に知られている。例えば、

(7) こんなわけで善霊の猫をとむらうためなら、人々は眉毛をおとし死体を麻布にくるんで、人体とおなじくミイラとなるよう葬った。(花輪莞爾『猫学入門』)

⁵ 「なら」文の前後件の事態が推断の意味を表しており、また思考の順序に合致する場合は、150例の中で、28例がある。

例(7)の前件の事態が結果であるが、後件の事態が根拠である。前後件の事態は思考の順序に合致している(「善霊の猫をとむらうこと」→「人々は眉毛をおとし死体を麻布にくるんで、人体とおなじくミイラとなるよう葬ったこと」)。また、前件の事態(「善霊の猫をとむらうこと」)は話し手と聞き手が共に了解した命題である。次に、概念化の過程で、実際、後件の事態は概念化の起点であり、トラジェクターとなるが、前件の事態は結果として、概念化の終点であり、ランドマークとなっている。概念化が完成した後で、注意の焦点が後件の事態に置かれているので、後件の事態は図となるが、前件の事態は地となっている。この場合には、概念化の過程中的のトラジェクターは概念化の完成後の図と重なっている。

最後に、「なら」文が[+推断性]を表す場合には、その前件の事態は已然の意味を表すが、後件の事態は確定性の事実でない例を見てみよう。例えば、

(8) 私がそれらの集団のいずれにも帰属しないと意識したなら、私の孤独が癒されることもなければ、私の成長も不可能であろう。(竹沢尚一郎『共生の技法』)

例(8)の前件での「～たなら」は已然の意味を表している。後件での「～であろう」は推測の意味を表すので、断言性の程度が相対的に弱いのではないと思われる。しかしながら、表3の統計結果によると、後件の事態の確定性や断言性はあまり弱くないと考えられる。後件の事態が未然であっても、後件の[事実]の程度に完全に影響をもたらさないものと思われる。よって、ある程度の客観性を表しており、主観性の程度も少し弱くなるのであろう。

例(8)の前後件の事態は思考の順序に合致している(「私がそれらの集団のいずれにも帰属しないと意識したこと」→「私の孤独が癒されることもなければ、私の成長も不可能」)。概念化の過程で、前件の事態が起点であり、トラジェクターとなるが、後件の事態が終点であり、ランドマークとなる。概念化が完成した後で、前件の事態は地となるが、後件の事態が図となり、注意の焦点である。

以上をまとめると、「なら」文が[+推断性]を表す場合には、[前件：+事実][前件：+断言性][前件：+確定性][前件：+已然][前件：+共通認識][後件：±事実][後件：±断言性][後件：±確定性][後件：-已然][±主観性]という意味素性を有している。

5 “既然”文の意味連続性

先行研究のように、“既然”文の表す推論意味は因果と条件との間にある。「なら」と同じように、日中対訳の角度から、取り敢えず間接的に既然”文の意味連続性を検証するために、表4のように、『中日対訳コーパス』における“既然”文の翻訳結果を整理した。

表 4: “既然”の『中日対訳コーパス』における翻訳結果⁶

翻訳結果	A ゆえ	B なら	C 以上	D だから	E から	F たら	G ので	H 無標
数量	1	24	1	18	1	4	6	2

表 4 の調査結果から、「なら」「以上」のような推論意味を表す関連標記の他、「たら」のような仮定関係を表す関連標記もあれば、「ゆえ」「だから」「から」「ので」のような原因・理由表現の関連標記も多くあることが分かる。

次に、『北京言語大学コーパスセンター』（BCC）を使い、“既然”を検索対象にして、ランダムに 150 例の例文を選び出し、その意味特徴と構文特徴を分析して、定量的方法により、各種の意義素の傾向をまとめることにする。そして、時間順序に基づいて、“既然”文の [+因果性] と [+推断性] を表す場合に、それぞれどのような意義素性を有するのかを明らかにすることにしたい。

因果関係は客観的な因果関係と主観的な因果関係に分けられる。[+推断性] を表す場合は主観的な因果関係を表す傾向があるが、[+因果性] を表す場合は客観的な因果関係を表す傾向があると思われる。

5.1 [+因果性]: [+行動の順序] の場合

この場合には、“既然”文の前後件の事態が事実である。[事実] は [確定性] 或いは [断言性] に接近しているものと考えられる。

まず、前後件の事態はもう発生しており、[已然] の意味特徴がある。次に、前後件の事態は事実であるので、[事実] [断言性] [確定性] の意味特徴がある。最後に、客観的な事実に基づいて、[主観性] の程度が弱いのであろう。前後件の事態の因果関係を表す場合には、前件の事態は話し手と聞き手が共に了解した命題であり、あるいは、聞き手がまだ知らない命題である。例えば、

(9) 既然自己的事情已经有了相当不错的进展，他也就心甘情愿地听父亲谈话，而自己一声不吭。（托马斯·哈代《德伯家的苔丝》）

例 (9) の前後件の事態は何も発生したので、行動の順序に合致している（“自己的事情已经有了相当不错的进展”→“他心甘情愿地听父亲谈话，而自己一声不吭”）。前件の事態は概念化の起点であり、トラジェクターとなるが、後件の事態は概念化の終点であり、ランドマークとなる。概念化が完成した後で、後件の結果は図となるが、前件の原因は地となる。例(9)は客観性の事実を叙述しているので、その主観性も弱いのであろう。また、前

⁶ 調査を行った範囲は北京日本学研究中心編『中日対訳コーパス』における 22 の文学作品（《盖棺》、《丹凤眼》、《辘轳把胡同 9 号》、《关于女人》、《活动变人形》、《红高粱》、《金光大道》、《家》、《轮椅上的梦》、《呐喊》、《彷徨》、《青春之歌》、《倾城之恋》、《棋王》、《人到中年》、《人啊，人》、《上海的早晨》（上）、《霜叶红似二月花》、《天云山传奇》、《小鲍庄》、《骆驼祥子》、《钟鼓楼》）である。有効な例文の数量は 57 例である。

件の事態は聞き手に知られない可能性もあると思われる。

(10) 但是她既然已经箭离弦上了，那就不能由于天气不好而退回。(托马斯·哈代《还乡》)

(11) 你既然给了我，就不要再收回。(莫言《红高粱家族》)

例(10)(11)の前件の事態はもう発生したが、後件の事態も確定性の叙述である。しかしながら、後件の事態が事実でない場合もあると考えられる。実際、例(10)の場合には、“由于天气不好退回去了”の状況が生じる場合もあり、例(11)の場合には、“给出了再收回”のケースもあり得る。そのため、“既然”文が[+因果性]を表す場合には、[+已然]という意義素性を有しているが、[-事実][－断言性][－確定性]という意義素性をも有している。

例(10)(11)の前後件の事態も行動の順序に合致している。また、概念化の過程でのトラジェクターは概念化の起点として、前件の事態であるが、ランドマークは概念化の終点として、後件の事態である。概念化が完成した後で、前件の事態は背景化の地となるが、後件の事態は前景化の図となっている。

要するに、表5のように“既然”文が[+因果性]を表す場合には、[±事実][±断言性][±確定性][+已然][－主観性][前件：±共通認識]という意義素性を有している。

表5：“既然”文の[+行動の順序]を表す場合⁷

意義素	[事実]	[断言性]	[確定性]	[已然]	[主観性]	[前件：共通認識]
数量比例	62/89	62/89	62/89	89/89	39/89	60/89
程度	±	±	±	+	-	±

5.2 [+推断性]：[+思考の順序]の場合

“既然”文は[+推断性]を表すと、已然の原因を根拠に、結果を推論することと已然の結果を根拠に、原因を推論することという二つの場合に分けられる。後者は、その後件で“可见”“因为”のような原因性を表す標識が見られる。[+推断性]を表す場合の意味は話し手がpを思い出したから、qと推論しているということである。

この場合には、“既然”文の後件の事態が必ずしも事実ではないが、前件の事態が話し手に確定される事実である。例えば、

(12) 你们既然不去，就不应该接人家这表。(李准《黄河东流去》)

例(12)の前件の事態は事実であるが、後件の事態は事実ではない。実際、その結果は“接了人家的表”である。この場合には、思考の順序に合致している(“你们不去”→“不应该接人家这表”)。前件の事態は概念化の過程中的の起点であるトラジェクターとなり、後件の事態は概念化の終点であるランドマークとなる。この概念化が完成した後で、

⁷ “既然”文の前後件の事態が因果の意味を表しており、また行動の順序に合致するケースは、150例中、89例である。

前件の事態は背景の内容としての地となり、後件の事態は注意の焦点としての図となる。

後件の事態は必ずしも事実ではないので、[後件：－事実][後件：－断言性][後件：－確定性]という意義素性を有するものである。また、[後件：－已然]という意義素性を有している。しかしながら、前件の事態は話し手に確定される事実であるので、[前件：＋事実][前件：＋確定性][前件：＋断言性]という意義素性を有しているが、まだ発生していない可能性があるので、[前件：±已然]という意義素性を有していると思われる。例えば、

(13) 既然你要和我们家联姻，有些事我必须和你谈谈。(林语堂《朱门》)

例(13)の前件の事態がまだ発生していないが、将来、ぜひ発生するので、[確定性][事実]の意味特徴がある、という場合には、思考の順序に合致している(“你要和我们家联姻”→“有些事我必须和你谈谈”)。実際、現実の順序は“有些事我必须和你谈谈”

→“你要和我们家联姻”である。そのため、概念化の過程で、後件の事態は概念化の起点であり、トラジェクターとなるが、前件の事態は概念化の終点であり、ランドマークとなる。この概念化が完成した後で、後件の事態は表したい重点であり、図となるが、前件の事態は背景化の情報として、地となる。つまり、概念化の完成後での図は概念化の過程でのトラジェクターと重なっている。また、前件の事態は話し手と聞き手との両方が共に知っている命題である。

“既然”文は確定性の推論を前提にする必要があるので、“既然”文の前件の冒頭部分には“大概”、“或许”、“看起来”、“可能”、“好像”などの推測表現は許されない。

“既然”文が[＋推断性]を表す場合には、話し手の推論に基づいて、[＋主観性]という意義素性を有している。後件で主観的な標識⁸がよく見られ、話し手が述べている事態に対する主観的な態度と認識に関連しているので、主観性が一般的に強い(李晋霞、劉曇,2004)。それと同時に、主観性は時間順序に制約の作用をもたらす可能性があるので、“既然”文は[＋推断性]を表す場合に、時間順序の面では、[＋因果性]を表す場合と異なる結果が生じている(例(13))。

以上の内容をまとめたのが表6である。“既然”文が[＋思考の順序]を表す場合には、[前件：＋事実][前件：＋断言性][前件：＋確定性][前件：±已然][前件：＋共通認識][後件：－事実][後件：－断言性][後件：－確定性][後件：－已然][＋主観性]という意義素性を有している。

⁸ 例えば、“一定”、“可能”、“必定”、“应该”、“最好”、“还是”、“只好”、“只得”、“索性”などの副詞である。また、“情愿”、“宁愿”、“应当”などのモダリティに関する動詞と“也好”などの助詞もよく後件で見られる。そして、話し手の主観的な論理的推論を表す言語成分もよく存在している。例えば、“想来”、“我看”、“可以推论”、“认为”、“以为”、“可见”などである。

表 6：“既然”文の [+思考の順序] を表す場合⁹

意義素	[前件：事実]	[前件：断言性]	[前件：確定性]	[前件：已然]	[前件：共通認識]	[後件：事実]	[後件：断言性]	[後件：確定性]	[後件：已然]	[主観性]
数量比例	61/61	61/61	61/61	51/61	61/61	15/61	15/61	15/61	0/61	39/61
程度	+	+	+	±	+	-	-	-	-	+

6 おわりに

複文の意味を研究する際、前後件の順序と切り離して考えることはできない。そのため、本稿では、「なら」文と“既然”文の意味に基づいて、前後件の事態の時間順序を分析することで、両者の意味的連続性における本質的な意義素性を明らかにした。定量的方法により、その意味的特徴と傾向についても明確にした。それと共に、認知言語学における図時分化とトラジェクター・ランドマークとの連合により、複文の前後件の順序関係に対して解釈を行うことにより、事態の時間順序を分かりやすく分析することができるものと考えられる。次の表が本稿の分析結果である。

	[+因果性]：[+行動の順序]	[+推断性]：[+思考の順序]
“既然”文	[±事実] [±断言性] [±確定性] [+已然] [-主観性] [前件：±共通認識]	[前件：+事実] [前件：+断言性] [前件：+確定性] [前件：±已然] [前件：+共通認識] [後件：-事実] [後件：-断言性] [後件：-確定性] [後件：-已然] [+主観性]
「なら」文	[+事実] [+断言性] [+確定性] [+已然] [-主観性] [前件：±共通認識]	[前件：+事実] [前件：+断言性] [前件：+確定性] [前件：+已然] [前件：+共通認識] [後件：±事実] [後件：±断言性] [後件：±確定性] [後件：-已然] [±主観性]
現実の時間順序と反対の思考の時間順序に合致する場合には、概念化の過程中的のトラジェクターは概念化の完成後での図と重なる。		

参考文献

- [1] 刘利, 朱光鑫. “既然”句的性质及归类问题 [J]. 语言科学, 2025, 24 (1).
 [2] 吴吉东, 董海涵. 汉英因果复句句法与语义界面的认知语法研究 [J]. 山东外语教

⁹ “既然”文の前後件の事態が推断の意味を表しており、また思考の順序に合致するケースは、150例中、61例である。

- 学,2024,45(6).
- [3] 杜娟.用射体—界标关系解读英语带施事被动结构[J].西安外国语大学学报,2010,18(4).
- [4] 李卿,任素贞.射体—界标理论下的英语倒装句焦点凸显功能[J].青岛农业大学学报(社会科学版),2008,20(1).
- [5] 彭芳.图形—背景的概念化与汉语语序[J].齐鲁学刊,2013,(2).
- [6] 文旭,刘先清.英语倒装句的图形—背景论分析[J].外语教学与研究(外国语文双月刊),2004,36(6).
- [7] 宫同喜.基于语料的英、汉语图形、背景语序关系对比研究[J].外语电化教学,2012,(6).
- [8] 么孝颖.从图形—背景理论看仿拟修辞格生成的认知本质[J].外语研究,2007,(4).
- [9] 王文斌.从图形与背景的可逆性看一词多义的成因—以汉语动词“吃”和英语动词“make”为例[J].外语与外语教学,2015,(5).
- [10] 川端善明.接続と修飾[J].国語国文,1957,27(5).
- [11] 甲田直美.談話・テキストの展開のメカニズム--接続表現と談話標識の認知的考察--[M].東京:風間書房,2001.
- [12] 樋口万里子,大橋浩.節を超えて—思考を紡ぐ情報構造—[A].見:大堀壽夫編.認知コミュニケーション論[M].東京:大修館書店,2004:101—136.
- [13] 郭继懋.“因为所以”句和“既然那么”句的差异[J].汉语学习,2008,(3).
- [14] 刘月华等.实用现代汉语语法(增订本)[M].北京:商务印书馆,2002.
- [15] 钟小勇,张霖.“既然”句和“因为”句主观性差异探[J].汉语学习,2013,(4).
- [16] 李晋霞,刘云.“由于”与“既然”的主观性差异[J].中国语文,2004,(2).
- [17] 戴浩一(著),黄河(译).时间顺序和汉语的语序[J].国外语言学,1988(1):10.
- [18] 邵洪亮,史春磊.“既然p,(那么)q”的引述用法与表达功能—兼及“既然”和“由于”的区别[J].汉语学报,2025,(3).
- [19] 李光赫.条件复句的日汉对比研究[M].广州:世界图书出版广东有限公司,2012.
- [20] 陈禹.从“既然”“因为”之别看原因小句的意外性分化[J].语言科学,2023,22(3).
- [21] 张静.“既然”式推断复句[D].武汉:华中师范大学,2015.
- [22] 邢福义.“却”字和“既然”句[J].汉语学习,1996,(6).
- [23] 邢福义.汉语复句研究[M].北京:商务印书馆,2001.
- [24] 吕叔湘.现代汉语八百词(增订本)[M].北京:商务印书馆,1999.
- [25] Ronald W. Langacker(著),牛保义、王义娜、席留生、高航(译).认知语法基础(第一卷):理论前提[M].北京:北京大学出版社,2013.
- [26] 尹聖楽.«るなら」と「たなら」の使い分け[J].日本語文法,2023,23(1).
- [27] 久野暉.日本文法研究[M].東京:大修館書店,1973.

- [28] 網浜信乃.条件節・理由節—ナラとカラの対比を中心に— [J] .待兼山論叢 日本学編, 1990,(24).
- [29] 前田直子.日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究— [M] .東京：くろしお出版, 2009.
- [30] 李红.«と」「ば」「たら」「なら」条件句的语用分析 [J] .河南理工大学学报（社会科学版）, 2015,16(4):449-455.
- [31] 王传礼.«と、ば、たら、なら」的异同 [J] .日语学习与研究, 2001,(2):78-81.
- [32] 小山哲春・甲田直美・山本雅子.認知語用論 [M] .東京：くろしお出版,2016.
- [33] 山梨正明.認知言語学原理 [M] .東京：くろしお出版,2000.
- [34] 戴耀晶.戴耀晶语言学论文集 [M] .上海：复旦大学出版社, 2017.
- [35] 冯军伟.断言与真值、知识和信仰 [J] .外语学刊, 2023, (2): 105-106.